

「放課後子ども教室推進事業」の意義

信州大学教育学部教授 平野吉直

《地域子ども教室推進事業の経緯》

私は平成 17 年度、当時の「地域子ども教室推進事業」の委託を受け、実行委員長として「信州大学こどものひろば」を実施した経験があります。そのときは、勤務している信州大学教育学部のグラウンドや武道場を借用して、大学に隣接している地元小学校 1～5 年生 25 名を対象に、平日と土曜日の年間 27 回の活動を行いました。子どもの指導は、信州大学教育学部で野外教育を学んでいる大学生・大学院生があたりました。参加者の募集は、小学校から、年間をとおして参加できることを条件としたチラシを各家庭に配布し、趣旨に賛同し参加を希望する保護者への説明会を実施した後、「こどものひろば」が始まりました。

活動内容は、事前にある程度企画・準備をしておきましたが、参加した子どもたちの意見を反映し、途中で柔軟に変更していきました。実施したおもな活動は、自然観察ゲーム、雑草取り・畝作りから始まったさつまいもの栽培と収穫、草木染、川の探検、枯れ枝や木の実を使った工作、雪遊びなどです。また、自炊を伴う一泊キャンプ（テント泊）も二回実施しました。

本稿では、この「地域子ども教室推進事業」の経験をふまえながら、全国展開されつつある「放課後子ども教室」の意義を見つめなおし、推進・普及のための課題等を考えてみたいと思います。

《仲間との外遊びをしなくなった子どもたち》

子どもたちの体験不足を示す調査結果については、各種の報告が多数出されています。私がかかわった全国調査では、平成 10 年度と平成 17 年度に同じ質問項目で自然体験活動の頻度を比較していますが、その中で、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」がないと回答した子どもが 19% から 35% に、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」がないと回答した子どもが 34% から 43% に、「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」がないと回答した子どもが 22% から 35% にいずれも増加するなど、ここ数年で子どもの体験活動の頻度が大きく減少していることを示しています。

ひと昔前の子どもたちは、日常生活の中で、日々、仲間との外遊びをとおして、あたりまえのようにこうした多様な体験を積み重ねてきました。しかしながら、近年の子どもたちに目を向けると、まずは、屋外で仲間とともに自由に遊ぶ姿を見かけなくなったことに気づき

ます。放課後に、空き地や路地、公園や神社や寺など、いろいろな場所で楽しそうに仲間と遊んでいる子どもの姿は、今ではほとんど見られません。

子どもが、仲間と遊ぶことを嫌いになったわけではありません。そうした場や機会さえあれば、子どもたちは、鬼ごっこ、かくれんぼ、缶蹴り、草野球などで夢中になって遊びます。それではなぜ遊ばなくなったのでしょうか。いくつかの理由が考えられます。まず、都会では、自由に遊ぶことのできる場所が少なくなりました。一方、豊かな自然に囲まれた地では、遊ぶ場所はあるものの、過疎や少子化で遊ぶ仲間が少なくなりました。危険が潜む川や池などは、学校や地域で、遊ぶことや、近づくことが禁止されています。その一方で、ひとりでも楽しむことのできるテレビゲームや、ひとりで長い時間没頭できるコンピュータは、全国の家庭に広く普及しました。学習塾や習いごとにかよう子どもも多くなっています。また、子どもを巻き込む悲惨な事件や事故が全国で発生しており、愛する子どもをもつ親が、「外でいっぱい遊んできなさい」などとはいえない時代となっています。子どもどころ、遅くまで泥だらけになって外で遊んで帰宅して、親にしかられたことはあっても、ほめられたという記憶がある人は少ないでしょう。しかし、子どもにとって仲間との外遊びは、健全な成長に必要な不可欠であると考えられます。仲間との外遊びがなくなりつつある今日、その意義を改めて問い直さなければなりません。

《放課後子ども教室推進事業の教育的意義》

現代の子どもたちの放課後は、家の中で体を動かさずに過ごし、他人とあまり交流することなく、家族とのかかわりも少ないという時間を過ごしています。

たしかに、勉強することはたいせつです。学習塾にかようこと、テレビやパソコンから学ぶことも多くあります。しかし、あまりにもそうしたことに時間を費やすことで、子どもの健全な成長に不可欠な 活発な身体活動、 他者との交流、 自然や社会での直接体験、 創造・工夫・我慢、といった機会を得る時間が相対的に失われます。日常での仲間との遊びから自然発生的に得ることができたこうした機会の喪失が、子どもたちの健全な成長に大きく影響し、さまざまな教育問題を引き起こしているのではと思います。

現在、日本では国をあげて自然体験や生活体験などの体験活動を推進していますが、一方で、学力低下の問題が社会でクローズアップされ始めました。子どもたちに勉強から得られる「学力」を身につけさせることはたいせつですが、それと同じくらい、多様な体験をとおして健全な体と心を育てる機会と場を提供することもたいせつです。そのバランスをうまく調整するのが教育の役割でもあり、両者は決して相反するものではありません。

子どもたちの成長にとって不可欠な学びの機会が失われています。私たち大人は、そ

れらを補う努力をしなければなりません。子どもたちに自由に遊ぶことのできる時間を保証するとともに、家庭や地域で意図的・計画的に多様な体験活動の機会や場を提供することが必要です。ここに放課後子ども教室推進事業を全国各地で展開する意義があります。

《「信州大学こどものひろば」の成果とその発信》

平成17年度に実施した「こどものひろば」は、わずか年間27回の活動でしたが、回数を重ねるごとに子どもたちの成長を見ることができました。最初は担当する学生とのコミュニケーションも満足にとれなかった子どもたちが、同級生といっしょになって遊び、他学年の子どもとも協調して作業ができるようになるなど、特に、他者との人間関係に大きな変化が見られました。これらの変化は、毎回15分程度、活動の終了時に子どもたちが記述した「ふりかえりシート」からも見ることができます。「どんなことがたのしかったですか？」というシートの質問に対して、当初は、「おにごっこ」といった短い単語の記述が多かったものの、徐々に「ちゃんとしてあそんだこと」など、他者との関係を含めた具体的な記述が多くなっています。集団でのさまざまな遊びや体験をとおして、子どもたちにコミュニケーション能力や人間関係能力が身についたことが、「こどものひろば」を実践した責任者として最も強く感じた成果です。

また、「こどものひろば」では、スタッフと保護者のコミュニケーションツールとして、10回の通信を発行して保護者に届けました。通信では、次回以降のお知らせとともに、子どもたちの様子や変化をできるかぎり伝える努力をしました。年度末には、「こどものひろば」の1年間の取組や成果を報告する機会も設けました。これらの取組によって、日常の体験活動の積み重ねが、子どもの成長にとってきわめて重要であることを、参加した子どもの保護者に周知できたと思っています。事情があって1年間で終了した「こどものひろば」ですが、多くの保護者から継続を望む声を聞くことができました。

現在各地で「放課後子ども教室」を実施されている委員会には、できるかぎり子どもの様子や変容を「ふりかえりシート」や指導者の観察記録として残し、「通信」や「報告会」などをとおして、保護者や学校にその情報を届けることを勧めます。こうした取組によって、「放課後子ども教室」に対する保護者や学校の理解が深まり、その拡充や継続につながると思っています。また同時に、成果の記録と分析は、実施した内容や指導方法等の評価・改善、指導者の資質向上にも役立つものとなります。

《小学校の理解と協力が不可欠》

放課後子ども教室推進事業が、今年度から始まりました。全国の実施状況を見ると、都道

府県によってかなりの差があるものの、全体としていまだ普及しているとはいえない状況です。始まったばかりの事業ですから、予算、指導者、場所、安全の確保など、解決しなければならない多くの課題が実施を困難にさせているのだと思います。このうち、実施地区レベルの計画段階で大きな課題となるのは、指導者と場所の確保でしょう。私たちが実施した「こどものひろば」では、幸いにも指導を託すことのできる大学生が多くいて、また、小学校に隣接する大学の協力が得られ、指導者と場所の確保に支障はありませんでしたが、こうした例はまれです。今後、放課後子ども教室推進事業が全国各地に普及するためには、指導者と場所を確保する努力をしなければならず、それにはどうしても実施する地区の小学校の協力が不可欠となります。

生涯学習の進展とともに、以前に比べて学校と地域の連携が深まり、地域の人々が頻りに学校とかかわるようになってきました。学校には、放課後の子どもの指導を託することができる人々の情報があるはずで、学校から依頼されれば、地域の子どものために協力を惜しまない人々も多いはずで、この事業にかかわる地域の人々の発掘が契機となって、今後さらに学校と地域の交流が活発になることもあるでしょう。指導者の情報提供、地域への指導要請など、指導者確保に向けて、学校側からの積極的なアプローチが望まれます。

体育館やグラウンドなどの学校開放も広がってきましたが、放課後子ども教室推進事業実施のためには、子どもたちが荒天でも安心して集うことができる空き教室など、屋内施設の確保が必要となります。アウトドアでの活動が中心であった私たちの「こどものひろば」ですが、子どもたちが荷物を置いたり、集まって活動の相談をしたり、ふりかえりをしたりするために、柔道場を有効に使いました。ここでも実施する地区の小学校の協力が不可欠です。学校によっては、空き教室がないからとの理由で協力を拒む例も多いと聞きますが、一方では子どもたちにさまざまな体験活動を積み重ねてやりたいという校長のリーダーシップにより体育館やグラウンド、図書室などをうまく活用しつつ、工夫を重ねて実施されているところもあると聞きます。たしかに、現在使用している教室等を地域に開放するためには多くの課題があると思いますが、子どもたちにさまざまな体験を積み重ねさせることは、学校に与えられた使命でもあります。ぜひとも、保護者への協力を求めつつ、学校がこの事業に理解を深め、積極的に関与していただきたいと思います。

現代の子どもたちにとって、充実した放課後の生活や活動は、健全な成長にきわめて大きな意味をもちます。家庭・学校・地域が一体となって、子どもの健全育成を図るという観点から、全国各地で有意義な放課後子ども教室推進事業が展開されることを望んでいます。